

PRESS RELEASE

■本リリースは、福山市政記者クラブで配布しております。

2017年10月6日

報道関係各位

社会医療法人祥和会
福山脳血管医学研究所
脳神経センター大田記念病院

脳神経センター大田記念病院の治療実績をもとに行われた 病院と京都大学との共同開発が アメリカ脳卒中学会(American Stroke Association)の オフィシャル誌 “Stroke” に掲載されました。

日本臨床疫学会 第1回年次学術大会では、「Best Poster Award」を受賞

去る8月25日、アメリカ脳卒中学会(American Stroke Association)のオフィシャル誌 “Stroke” オンライン版に、社会医療法人祥和会(理事長・大田泰正／本部所在地:福山市沖野上町)の「脳神経センター大田記念病院」「福山脳血管医学研究所」と、京都大学大学院医学研究科・人間健康科学系専攻・生体防御・病態看護学の西垣昌和准教授の教室が共同で行った研究開発をまとめた論文「Assessment Model to Identify Patients With Stroke With a High Possibility of Discharge to Home」(急性脳卒中患者の自宅退院アセスメントツールの開発)が掲載されました。

Stroke 誌は、世界における脳卒中分野のトップジャーナルとされており、大学や公的医療機関ではない、民間の医療機関での研究が掲載されることは、大変珍しいことです。

【Stroke オンライン版 2017年8月25日公開／英文】

<http://stroke.ahajournals.org/content/early/2017/08/25/STROKEAHA.117.018075>

また、同研究開発は、去る9月30日、10月1日に東京大学にて開催された「日本臨床疫学会 第1回年次学術大会」にて、ポスター発表され、「Best Poster Award」を受賞しました。

■研究開発の骨子

「急性脳卒中患者の自宅退院アセスメントツール」とは、救急車等で病院に運び込まれた急性期の脳卒中患者さんに対して、入院後早い段階から、少ない項目で、高精度に自宅退院を予測できるツールです。

急性期脳卒中患者さんが入院後、早期に退院先(自宅退院／転院)を予測できれば、より適した医療資源につなげることができます。

しかし、自宅退院の可能性を系統的に評価できるツールは、これまでありませんでした。そこで、本研究

開発では、脳神経センター大田記念病院に入院した脳卒中患者さんのデータを使って、入院から1週間以内に自宅退院できる可能性の高い患者さんを識別するアセスメントツールを開発しました。

具体的には、病型、発症後3日以内に測定された日常生活動作自立度、麻痺の有無といったデータをもとに、自宅退院可能性をスコア化するものです。

■研究開発の中心となって動いたのは、 大学4年の学部生(当時)でした。

この研究開発は、脳神経センター大田記念病院の脳卒中患者さん3,200人(2011～2015年)の治療実績と退院先データを整理、分析し、行われたもので、京都大学大学院医学研究科・人間健康科学系専攻・生体防御・病態看護学・西垣研究室に所属していた板谷崇央さん(いたや・たかひろ／執筆当時、大学4年生)と、脳神経センター大田記念病院の脳神経内科部長・野村栄一医師、村上祐介理学療法士、福山脳血管医学研究所の福嶋朋子研究員、大田章子研究員、そして西垣准教授が、共著者として発表されました。

この研究開発の中心となって動いた板谷さんにとっては「卒業論文」であり、昨年、2016年夏、福山市内に仮住まいし、福山脳血管研究所に約1ヵ月間にわたり通い、脳神経センター大田記念病院の臨床データを整理・分析する実務にあたりました。

論文執筆にあたり、指導にあたった西垣准教授は、

「この評価指標は、国内では初めてのものではないか、と思います。研究が出来た背景には、全国上位の治療実績を持つ脳神経センター大田記念病院のデータベースとその管理者、同院の医師、看護師、理学療法士からなる Contents Specialist の洞察があったことを忘れてはなりません」

と、コメントされています。



▲板谷崇央さん(右)[現・京都大学大学院医学研究科・社会健康医学専攻]と、指導にあたった西垣昌和准教授。

■本件についてのお問い合わせ

社会医療法人祥和会

広報コミュニケーショングループ

担当:島津 英昌・神野 貴志

☎084-975-3909 [広報直通]

〒720-0825 広島県福山市沖野上町 3-6-28